第 338 回 昭和の森自然観察会

冬の植物の過ごし方

梅宮玲子（市原市）

日　時：2020 年 2 月 9 日（日）13～15 時　　天気：晴れ
参加者：17 名（大人 12 名、子ども 5 名）指導員 8 名他 1 名
担当指導員：佐野由輝・梅宮玲子

良く晴れた冷たい風が吹く中、クロスカントリー大会と重なり、出足がちょっと気になりましたが、元気な子ども達も含めて、「冬の植物の過ごし方」の観察会が始まりました。

アスレチック広場からスタート。植物大好きの小学生がクヌギの頂芽のうろこ状の重なりを数えて 12 枚あることを確認しました。隣のハクウンボク（裸芽）、毛皮を着たコブシの頂芽も一人ひとり譲り合って観察しました。

視線を地面に落とすとみんなの足元には、いろいろな種類のロゼットを発見。仏様の台座に似たところから、古来日本では仏の座とも、呼ばれていたそうです。土手のムラサキシキブは裸芽。サクラの冬芽と樹木がどこから呼吸しているか、皮目も観察。エノキはゆっくり成長するタイプのため冬芽は比較的小さくジグザグについていました。

ちょっと移動して、アカシデ、イヌシデの順に、目をつぶった子どもたちの頬を頂芽でツンツン。微妙な硬さの違いを皮膚で感じました。

市町村の森では、スズカケノキの落ち葉をみんなで探します。落ち葉の根元のキャップを頂芽の先端にかぶせるとぴったり（葉柄内芽）。近くの、ハリエンジュの冬芽は針と針の間に隠れて、他の動物に食べられないように、隠芽となって大事な冬芽を守っていました。

展望台の脇を通り、台風で倒れたトチノキの枝についている大きな冬芽を観察。表面の粘々は薄れていましたが、芽を剥いていくと粘々がまだ残っています。近くには大きな古い実も落ちていました。赤い、ミズキの冬芽はカニのハサミのような格好で上を向います。

隣の梅林では様々な種類の香りの違いを楽しみ、マテバシイの枝では葉の寿命を芽鱗痕から数えます（3 年位）。

メギの冬芽は鋭い棘にしつかりと守られていました。ハナミズキは葉芽花芽の形の違いを観察。

参加者は普段気付かずにいた植物の知恵と工夫に感心し、五感をふるに使って観察会を楽しむことが出来ました。

ロゼットをルーペで観察する子どもたち